
FAIRY TAIL ~ 五つの鳳 ~

レイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL ～五つの凰～

【Nコード】

N1125Y

【作者名】

レイト

【あらすじ】

滅竜魔導士とは、また違う特殊な魔法を持つ少年リオが妖精の尻尾くフェアリーテイルで活躍する物語。この物語は原作に沿って話を進めていく方針ですが、物語の脱線、時間軸のズレなどが起こる可能性もありなので御注意を！

オリジナル話も入れていきます

キャラ設定

名前

リオ・クリーレン

伝説と言われる五つの輝きを放つ鳳凰に育てられた少年。鳳凰の名はレーベンハイル・・・五つの輝きにはそれぞれ、再生、闇、光、風、地の力が込められている。

能力

その輝きに応じて力を扱う大地の魔法。光と闇はリオの力ではバランスを上手く保てないため自ら扱うのを禁止している。この五つの輝きを合わせることで初めて大地の魔法を使用できるようになる

鳳凰と言ってもドラゴンにくらべ攻撃力も防御力も劣るが、自らの魔力を消費する再生の炎でそれを補っている。

再生の炎は他者を癒すのには不向きで、天空魔法のように他者を癒すことはできない。

この小説では鳳凰を大地の守り神として扱っていきます

キャラ設定（後書き）

この設定には後から付け足していく予定？もあるかも、ですよ！

新たな家族を

「ここが・・・魔導士ギルド、フェアリーテイルか・・・」

今、俺・・・リオ・クリーレンとはあるギルドに来ている。理由はいたって簡単だ鳳凰・・・レーベンハイルに少しでも近づくには有名なギルドにでも入って情報を集めるのが良い、そう判断したためだ。

俺はまだガキだ、一人で何かするには力が足りなさすぎる・・・ちなみに歳はわかんねえ、理由は俺がどこで生まれたのかがわからない・・・ただ、わかるのはレーベンハイルが俺をここまで育て大地の魔法を俺に教えてくれたってことぐらいだ。

「って、心の中で誰に説明してんだろーな・・・」

ま、何にせよ入ってみなきゃ話は進まない。

「・・・・・・・・」

あまりの騒がしさに絶句した・・・いや、二人のガキ・・・と、言っても俺もガキだが。

その二人が殴りあってるし、めちゃくちゃ騒がしいしで最悪だ。もう少し静かにできないものなのだろうか・・・

「お！新入りか？・・・って、まだ子供じゃねえか」

「マスターって人に会いたいでけど・・・」

「マスター？奥にいるのが、うちのマスターだよ」

・・・ちっさw、あ・・・wなんてつけちまったじゃねえか。

とりあえず、俺はそのマスターって人に話しかけてみる・・・いや、そうしないと話進まないしな！

「俺、ここのギルドに入りたいんだ・！！」

「ふむ・・・」

少しの間、真剣な眼差しで俺の目を覗き込むとすぐに顔を変え

「オッケー！！」

え・・・？こんな簡単に？試験とかないの？

「え・・・あの・・・」

「ん？」

「いいんですか？その・・・こんな、簡単に・・・」

「お前の目を見りゃわかる、何か大切な理由でもあるんじゃないろ」

「あ、ありがとうございます！俺、リオ・クリーレンって言います
！」

マ「ふむ、リオよ今からお前はこのギルドの一員。それを心していくんじゃぞ」

俺「はい！」

こんな感じで無事ギルドへ入ることに成功した・・・これで、一安心か・・・

？「おい！お前、俺と勝負しろ！」

俺「・・・・・・は？」

周りからは「ナツが新人と勝負するつてよ！」、「俺はナツに賭けるぜ」などと・・・良くわからない声が聞こえてくる

ナ「俺はナツ、お前は？」

俺「リオだ、それで・・・何でいきなり勝負？」

ナ「理由なんか知らねえ！」

えー・・・・・・知らないんだー・・・・orz

ああ・・・・俺・・・・このギルドでやっていけるかなあ・・・・？

新たな家族を（後書き）

次はナツとの戦闘です

滅竜魔導士

- リオside -

ナ「勝負だ勝負!!」

勘弁してくれ・・・俺はまだ力を使いこなせていないのに・・・

周りも盛り上がってるし断りづらいよな・・・仕方がない、やるしかねえな

俺「いいぜ、やってやるよ」

はあ・・・災難だ

ナ「いくぞ! 火竜の鉄拳!!」

俺「ちよっ!?! いきなりそれは・・・!! ぐはっ」

痛い・・・いや、痛すぎる。いきなり顔面殴りやがって・・・イライラしてきたぞ

ナ「ん? お前弱いんだな・・・」

ブチッ・・・

俺「やってやんよ、ツリ目の鼻たれ小僧」

俺が使うのは風・・・風の輝きだ

「なんだあれ・・・腕が翼に・・・!?」

周りが騒ぎ始めるのも無理はない・・・魔力により形成された風が翼を形作っているのだから

俺「風刃螺旋舞!!」

風の翼がおこす突風は全てを切り裂く刃となる・・・それが風刃螺旋舞^{ふうじんらせんぶ}

ナ「うおお!？」

つて・・・特に効いてる様子も無いっすね・・・あ、滅竜魔導士
つて体も丈夫なんだっけ?

ナ「なんだよ・・・やればできるじゃねえか、燃えて来たぞ!」

俺「ふう・・・この力は翼だけでなく手に集めることで力を上げる
ことも可能だ、お前ほどじゃねえけど」

ナ「上等だ!!いくぜ!!」

俺「俺もテンション上がってきたあ!!ぶっ飛ばす!!」

その後もどれだけの間戦闘が続いたことか・・・思い出したくも無い・・・まあ、楽しかったけどな

ナ「はあはあ・・・やるじゃねえか・・・」

俺「お前もな・・・」

？「リオ・・・と言ったか？」

俺「え？あ、はい」

ミ「私はミラジェーン・・・エルザ側についたらぶっ飛ばすぞ」

えー・・・話が見えねえよー・・・エルザって誰？ていうか、俺は何に巻き込まれてるんだ？

グ「俺はグレイ、あのクソ炎に付き合ってやるなんてお前もお人好しだな」

ちげーよ、付き合わされたんだよ。無茶苦茶だ・・・

俺「はは・・・はあ、疲れた」

こんなお出向かえは初めてだ・・・ま、悪くないかな。

リ「はい、これどうぞ。私はリサーナ、よろしくね」

俺「ありがと。俺はリオ、よろしく」

水を持ってきてくれた・・・ああ、普通の人がいて助かったよ。それにしてもナツ強かったな。

グレイやミラ、エルザも強いのかな？これは・・・俺が最弱フラグ？！

俺「神よ・・・俺にチカラをくれ・・・」

ミ「アイツ涙流しながら何か言ってるぞ・・・」

ナ「飯でも落としたんじゃないの？」

ああ・・・修行しないと・・・

こうして始まる俺の物語・・・あ、仕事しないと

俺「仕事、仕事・・・っと」

？「これなんてどうだろうか？」

俺「へえ・・・バルカンて何？」

？「ふむ、これは森バルカンという奴でな・・・」

それで、君は誰だ・・・

俺「あのー・・・君は？」

エ「私はエルザ、気軽にエルザと呼んでくれ」

この人が・・・結構真面目なイメージがするけどな

その後に見た光景は凄かった・・・女の子は誰よりも強い・・・うん、そう思うよ。ミラもエルザも喧嘩したら凄いんだもん、死ぬかと思っただわ

こうして、俺のギルドでの生活が始まった

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

リ「何やってんの？」

俺「ん？ちよつとギルドに入っただかりの事を思い出してたんだよ・・・」

ナ「また、勝負すつか？」

俺「しねーよ、馬鹿」

俺がギルドに入ってもう、数年経つ。今では、もうみんな俺の家族

同然だ。

俺「さて、今日も張り切って仕事に行くとしますか」

レ「あ、私も行く！」

この小さいのはレビィ・マグガーデン。最近コイツと仕事に行く回数が増えてきた。

今日のは簡単だな、山賊退治だ。

レ「早く、早くー！」

俺「昼寝してーよ・・・ま、いつか」

俺は今日も元気に妖精の尻尾やってます

仕組まれた依頼

- リオside -

俺「今日の依頼は・・・山賊の退治？楽勝だなっ」

レ「そうやって気を抜いてると怪我するよ？」

今俺とレビイとはある依頼を受け山賊の退治にやってきてる。最近いくつかの村が襲われているとの情報で、ちょうどフェアリーティルの近くまで来てるからグッドタイミングって感じだな。

俺「てか、お前チームは放っておいていいのかよ・・・」

レ「大丈夫、それにリオもチームみたいなものでしょ？」

そうなのか・・・知らなかったよ・・・。俺は今のところチームは組んでおらず一人で行くか、誘われたら一緒に付いていくみたいな状態でいつレビイのシャドウ・ギアに組み込まれたのかわかんないわけがない

俺「はあ・・・ま、目的地までちょっと距離があるし少し休むか」

レ「そうだね」

その目的地は山の最深部、山賊の隠れ家ってところだ。

俺「この依頼が終わったらとっとと休みてー・・・むしろ、旅行に

行きてーよ・・・」

レ「じゃあ、私達で行こうよ！旅行」

俺「そうだな・・・っ!？」

レ「ん？どうしたの？」

俺「いや、なんでもねえよ」

さつきから感じるこの胸騒ぎは何だ・・・？この依頼には何か裏がある気がしてならない。それにレビィは気づいてねえみたいだけど、さつき・・・ほんの一瞬、凄い魔力を感じた。

それは山賊なんてレベルじゃない・・・多分、今の俺じゃ勝てない・・・そんな力だ。もし、ソイツが襲ってきたらヤバイなレビィを庇って逃げるのは無理だ。

俺「面倒なことが起こらないうちにさつさと片付けるか・・・」

レ「面倒なこと？」

俺「ああ・・・面倒なことだ」

- レビィ side -

さつきからリオは何か考え込んでるみたいで何も喋らないし、何かを警戒しているみたいに見える・・・何かあるのかな・・・？

それに面倒なことってなんだろ……

とりあえず私は足を引つ張らないようにしなくちゃ！

- リオside -

あの後、山賊の退治したいは案外簡単に終わった。

あの強大な魔力は山賊のものじゃなかったってわけか……じゃあ、
一体何者だ……？

レ「ねえ、聞ってる？」

俺「え？あ、ああ悪い考え事しててな。何の話だったっけ？」

レ「旅行の話だよ！もう……」

俺「悪い悪い、今度はちゃんと聞くからさ。まずは場所だよな、や
っぱ旅行といたら……！？」

レ「！？」

今度はレビイも気付くだろつな……完全に俺らを狙ってやがる。

どこだ……どこから……

俺「よける……！」

レ「え？」

空からの魔法・・・これほどの威力、一体誰が！？それよりも、このままじゃ間に合わねえ！！

身代わりになるしかねえな・・・！

俺「ぐっ・・・！」

レ「リオ！？」

この魔力・・・普通の魔導士じゃねえ！

とりあえず、レビィを逃がすことを考えろ！！

俺「風の羽ばたきよ・・・レビィを・・・彼女をできるだけ遠くに飛ばせ！！」

俺の作りだす翼から一枚だけ羽を取り、レビィへ向けて魔力を開放するとレビィの体は宙を舞い遠くの街へと飛ばされる。

今度は相手の居場所がわかったぜ、ここは俺が食い止める！

俺「岩隔壁！！」

俺の岩石の翼から羽が舞い、巨大な岩の壁が現れる

？「やはり・・・目障りだな、フェアリーテイルは・・・」

俺「クソッ・・・どこの誰だか知らねえけど、アイツはもういねえ。お前の相手は俺がしてやんよ」

？「最初から君が狙いで来んだよ・・・不死鳥さん」

！？・・・俺が狙いだと？

俺「狙った？俺がこの仕事を引き受けない可能性もあったのか？」

？「君には特別な魔法をかけたからな・・・問題ないさ」

俺「俺が狙い・・・ね。ぶっ潰してやるから来いよ」

？「フンッ」

俺「ぐあああっ！！」

な、なにが起こった？アイツの手が光った瞬間痛みが・・・

？「お前はまだまだ未熟過ぎる、私のギルドで鍛えなおしてあげよう・・・我が幽鬼の支配者でな」
ファントムロード

俺「な！？」

瞬間俺は闇に包まれた・・・

- レビイ side -

私「そんな、足は引つ張らないって決めたのに！！」

遠くから見て岩の壁が崩れていくのが見える、あの魔法はリオがやられなければ崩れることはない・・・つまり、リオはあの魔導士にやられちゃった・・・ってこと・・・

私「早く皆に伝えないと!!」

涙が溢れて止まらない・・・どうしたらいいの？

- 三人称 side -

今フェアリーテイルへ一人の少女が駆け込んできた。彼女の名前はレビィ、先ほどまでリオと共にいた魔導士である

レビィ「みんな!! リオが・・・リオが・・・!!」

息も上がり、まともに話すこともできない。ギルドの仲間も普段とは違う雰囲気戸惑いを隠せないでいるようだ

グレイ「どうした？落ち着いて話してみろ」

それから彼女は今まで起きたことを話した

ナツ「アイツがやられた・・・？そんなことあるはずがねえ!!」

ミラ「そうだ、アイツは強い・・・!!」

仲間たちも今だに事実を受け止められずに戸惑っている。

レヴィ「私だけ・・・逃げてきた・・・！」

エルザ「無事で良かった・・・それにしても何者なんだ・・・ソイツは！」

これが、リオが消えた今から二年前の出来事。

その後はリオも見つかっておらず死んだ・・・と、いうことになっている

- リオside -

俺は一体どうなったんだ・・・わからねえ・・・記憶も曖昧だ、俺は一体・・・

「お前は我がファントムロードの魔導士だ」

俺はファントムロードの魔導士・・・？

「・・・お前は妖精を潰すのだ、ガジルと共に」

そうか・・・フェアリーテイルを潰すのが俺とガジルの仕事か

でも、何だ？この違和感・・・何かが引っかかるんだよね・・・

俺は誰なんだ・・・

ギルド襲撃

- リオside -

俺「ガジル・・・俺たちはギルドを襲撃するんだよな・・・」

ガジル「そつだよ、何だあ？ビビってんのか？」

馬鹿にしているように笑ってるが別にどうでもいい・・・

まるで自分の居場所を自分で壊してしまうような。そんな恐怖心が俺の心にあつた

俺「俺は本当に幽鬼の支配者のメンバーなんだよな・・・」

ガジル「ああ、そつだ」

何もかも滅茶苦茶だが、今は与えられた仕事をこなす・・・

そうして俺たちは深夜のギルドへと向かいぶつ壊した。主にガジルがやったんだけど・・・

その次の日の夜・・・

ガジル「俺は少しやることがあるからテメエはここで待ってる」

俺「やること・・・？」

そう言うとガジルはどこかへ行ってしまった

俺「待つてる・・・と、言われても暇だしな・・・行ってみるか」

そうしてガジルの向かった方へと、腕を炎の翼に変え飛んでいく。
何をやるつもりかは知らないが多分口なことじゃないんだろ

ガジル「何だ来ちまったのか」

俺「・・・」

そこで見たのは女が一人、男が二人・・・凄い傷で倒れていた。三人とも妖精の尻尾の魔導士だろ。その光景を見ているだけで怒りが湧いてくる・・・理由はわからない。

俺「やることつてのはコレか？」

ガジル「こうでもしねえとアイツらは動かねえからな」

その後ガジルは三人を木に貼り付け、幽鬼の支配者のマークを描きギルドへ戻ってしまった。

・・・なんでこんなに悲しくなるのかはわからない・・・俺は無意識のうちに再生の炎を三人に灯していた、この炎は長時間体内で燃え続ける明日まで持つはずだ

レビィ「リ・・・オ・・・？」

俺「俺の炎は他者を治す能力に長けているわけじゃないが傷の回復を早めてくれる・・・きつと明日の夜には良くなっているだろう・・・」

レビィ「うつ・・・」

俺の名前を知っている、何故知っているのか・・・そう聞こうとしたが、俺の名前を呟くと気絶してしまった

他の三人にも同様に手当てをし、木から下ろしてやった。だが傷はまだまだ癒えてはいない・・・きつと朝になっても傷だらけだ。

俺は何か心が引つかかったままギルドへと引き返した

懐かしき記憶

- 妖精の尻尾 side -

朝になりマグノリア南口公園・・・

そこには、ある木を中心に人集りができていた・・・「誰か下ろしてやってくれ」「でもあのマークは・・・」などという声が聞こえてくる

エルザ「すまん、通してくれギルドの者だ」

そう言つて妖精の尻尾S級魔導士のエルザが群集をかき分け進んでいく

グレイ「ジエット！ドロイ！！」

ルーシィ「レビィちゃん！！」

傷つき倒れている仲間の元へと駆け寄っていくのは妖精の尻尾の魔導士、グレイとルーシィである

マカロフ「ボロ酒場までならガマンできたんじゃないかな・・・ガキの血を見て黙ってる親はいねえんだよ・・・」

怒りを露にする、妖精の尻尾マスター・・・マカロフ

マカロフ「戦争じゃ」

•

- リオside -

ところで襲撃するんだっ
たな……

「ガジル、そうだ、今日で妖精の尻尾も終わりだなあ」

カルフは最上階を目指し登っていった

ようかね

俺
・
・
・
・
・
└

が止まる・・・

「エルザー、そんな何故だ……」

ぐれい「なっ・・・なんでお前が」

!!

俺「・・・俺にはわからない・・・何もわからないんだ」

腕を岩の翼へと変え風を纏わせる。地と風の輝きを合わせた混合魔法。

俺「岩烈旋空くがんれつせんくう>・・・五月雨!」

竜巻と岩翼の羽による二重魔法

ナツ「ぐっ・・・俺達は仲間だろ!」

俺「なか・・・ま・・・?」

ナツ「そうだ!お前は俺達妖精の尻尾の仲間だ!」

俺「違う・・・俺は幽鬼の支配者の魔導士だ・・・」

ナツ「ちげーよ、だったら何でお前は泣いてんだ?」

!?!?・・・俺が・・・泣いている?

気が付けば魔法は消えていた。何が何だかわからない・・・俺は一体何者なんだ・・・!?

俺を仲間と呼んだ魔導士とガジルが闘りあってるが今はそれも気にならない・・・俺は・・・

その考えはマカロフが上から落ちてきたことで中断された、どうやらジョゼの計画通りにマカ・・・ロフを・・・マス・・・ター・・・

を・・・マスター・・・はマカ・・・ロ・・・フ？

俺は・・・

ジヨゼ「さあ、リオさんも撤退を」

俺「・・・よ」

ジヨゼ「早く撤退を・・・うるせえよ・・・今はそんなのはどうでもいい・・・マスターはマカロフ？俺は幽鬼の支配者・・・？何が何だかわかんねーぞオイ・・・少し頭を冷やしてくる」

俺はジヨゼの元へは行かずマグノリアを目指し飛び立った

俺「俺は・・・どうしたらいい」

- ジヨゼ side -

やれやれ、困ったガキだ。記憶の操作を施してもそろそろ限界か・・・妖精共を潰してから手に入れるつもりだったがあのがキも記憶を取り戻しかけてる。だったら・・・妖精に戻してあげるくらいなら一緒に消してあげるしかないよなあ？

変わらぬ思い

- リオ side -

・・・今俺はマグノリアに来ている。良い街だ・・・俺はこの街を知っている。それで大好きなんだよな、きつと・・・

ズシィ・・・ズシィ・・・

何かが近づいてくる音が聞こえてくる。ふとそちらへ目を向けると・
・

俺「嘘だろ・・・！？まさか消し飛ばす気が・・・？」

わかっていた、ジョゼが魔導集束砲ジュピターを使用することが

俺「ギルドを守らねえと！！俺達の街を！！」

その思いと共に俺は不死鳥へと姿を変え飛び立った

- 妖精の尻尾 side -

エルザ「想定外だ・・・こんな方法で攻めてくるとは・・・」

六足歩行ギルド幽鬼の支配者がこちらへと進んでくるのが見える。

ジョゼ「魔導集束砲ジュピター用意・・・消せ」

ギルドから砲身が見え、魔力を溜めているのがわかった

エルザ「マズイ・・・！全員ふせるオオオ！！」

今この状況をどうにかできる可能性があるのはエルザだけしかない

エルザ「換装！！」

エルザは金剛の鎧へと換装しジュピターの衝撃にそなえる

ナブ「いくら超防御力を誇るその鎧でも・・・」

ナツ「エルザ！！」

グレイ「ナツ！！ここはエルザを信じるしかねえんだ！！」

飛び出そうとするナツを必死にグレイが抑えている。

ジュピターが放たれた瞬間に皆が驚いた、ギルドへと届く直前に何かが壁となりジュピターを受け止めているのである

エルザ「アレは・・・フェニックス・・・リオか！？」

一羽の不死鳥がジュピターをその身で受け止めているのである

リオ「ぐっ・・・やらせるかアアア！！！！」

なんとかジュピターを受けきったリオの体はその衝撃で吹き飛ばさ

れ妖精の尻尾へと激突する

ナツ「リオ!!」

ミラ「リオ!?!まさか・・・生きて・・・?」

リオのボロボロに傷ついた体の傷口から炎が吹き出し傷が治っていきが完全に治癒することはできなかった

カナ「なんて馬鹿なことを・・・!!アンタの能力は不死身じゃないんだよ!?!」

リオ「うつ・・・ごめん・・・皆・・・今、思い出したんだ俺は妖精の尻尾の魔導士だったこと。守りたかった・・・このギルドを・・・だから」

ミラ「今は喋っちゃ駄目、まだ深い傷もあるし魔力も消費してる・・・」

- リオside -

ジョゼ「記憶を弄ってやったのに人形にはなれなかったな、リオ・・・それにマカロフも戦闘不能。エルザだけで我々を潰すことはできない」

ナツ「記憶・・・?それで、リオは・・・テメエは許さねえ!!」

ジョゼ「ルーシィ・ハートフィリアを渡せ今すぐだ」

「ふざけんな!」「仲間を敵に差し出すギルドがどこにある!」「ルーシィは仲間なんだ!」

沢山の声が聞こえる・・・やっぱギルドはこうでなくっちゃな・・・

俺「オイ・・・ジョゼエ・・・お前には渡さねえよ、俺はギルドを壊し皆を傷つけた・・・それでも、ギルドの・・・コイツらの仲間を奪おうとするなら俺はテメエを潰す・・・!!」

ジョゼ「リオ、その体で何ができる?早く渡せ」

ナツ「俺達の答えは何があっても変わらねえ!!おまえ等をぶっ潰してやる!!」

ジョゼ「ならば、さらに特大のジュピターをくらわせてやる!!装填までの15分間、恐怖の中であがけ!!」

ちっ・・・まで、アレを撃つのか・・・止めねえと・・・でも意識が・・・

- ミラジエーン side -

ミラ「リオをギルドに、ルーシィは・・・」

ミラはルーシィに眠りの魔法をかけるとリーダーダスに隠れ家へと運ぶように頼み、自身はルーシィへと変身した

ミラ「昔から無茶ばっかやってたよね・・・リオ、でも生きていて良かった・・・」

リオは二年前に謎の魔導士きつとジョゼだ・・・ジョゼに襲われて行方不明になった。てつきり死んでしまったとばかり思っていたけれど記憶操作をされ自分は幽鬼の支配者だって思い込まされて無理やりギルドを襲わされた・・・だって、リオの顔には泣いたあとがあったから

さっき聞いた話ではレヴィ達の回復が凄く早いらしい・・・きつと再生の炎を三人に灯したんだと思う・・・

今ボロボロになっているリオを守れるのは私だけだ、皆はギルドを守ってくれている。すっかりしなくちゃ

- リオside -

俺は・・・

目を覚ますと、ギルドで寝かされていた。今ジョゼの話を聞いた限りではルーシイって子が捕まったらしい・・・エルザも幽鬼の支配者の中に入って行ったようだ

俺も・・・決着を着けよう。

待ってるジョゼ、俺の光でお前を消し飛ばす！！

絆の光を

- リオside -

ジヨゼの所へとたどり着いた時にはグレイ、エルフマン、ミラ、エルザもやられており今からトドメを刺そうとしているところだった

俺「さて、ゴミ掃除の時間だな」

ジヨゼ「フン、その体で何ができる？」

確かに俺の体は傷だらけだ・・・だが、魔力は十分にある。

俺「闇を退ける破邪の輝きよ・・・」

俺の体に光が宿り背中に4枚の翼が現れる

ジヨゼ「オイ・・・光の力は使えねえんじやなかたのか？」

俺「・・・仲間を守るため、今この力を解き放つ」

一層輝きが増し、4枚の翼に力が宿る

俺「破邪閃光！！」

翼から光の魔力が打ち出され、ジヨゼにぶつかると光は弾け爆発した

ジヨゼ「・・・ガキが、調子に乗ってんじやねえ！！」

ジヨゼもこれからが本気ってとこかな・・・

俺「イイネ、そんなぐらいは頑張ってもらわないと」

俺の両手からは光の剣が現れる

ジョゼ「デッドウェイブ!!!」

俺「ぐっ!!」

光の剣で受け止めるが破壊され、後方に飛ばされる

ジョゼ「大口叩いてた割には大したことねえな」

俺「邪悪なる魂に・・・閃光の裁きを・・・!!」

ジョゼの頭上から光の雨が降り注ぎジョゼを包み込む

ジョゼ「この野郎オ!!」

俺「まだ終わっちゃいねえ!!封印せよ光滅の剣!!魔封の双牙!!」

次々に作り出される光の刃がジョゼへと突き刺さり動きを封じる

俺「いくぞ・・・!!」

翼に全力を込めジョゼへと向ける

俺「刹華光滅刃!!!」

翼は大きな光の刃となり光の爆発でジョゼを包み込んだ

俺「はあはあ・・・やったか・・・？」

ジョゼ「今は・・・危なかったぞ・・・」

ボロボロになりながらも立っていた・・・

ジョゼ「テメエは仲間もろとも消え失せるオオ!!」

もう駄目か・・・?ここまでやったのに・・・!!

マカロフ「もう休め・・・リオ。お前は良くやった」

マスター・・・

俺「すいません・・・俺は・・・」

涙が溢れ止まらない

マカロフ「もう良い、わかっておる。全員この場を離れるんじゃ」

マスターに言われたとおりその場を離れギルドに戻ると、ファントムのギルドがどんどん光に包まれていくのが見えた

エルザ「妖精の法律・・・!」

妖精の法律・・・術者が敵と認識した者のみを聖なる光で攻撃する
超上級魔法

幽兵たちも消滅し、ファントムとの戦いは幕を閉じた

俺は自分の家族を傷つけすぎた・・・ここにはいられない

マカロフ「どこへ行くんじや？」

俺「・・・俺は・・・仲間を傷つけました。たとえ、俺の意思では無いにしても・・・それは変わらない」

マカロフ「そうじゃな・・・リオ貴様には・・・」

破門だろうな・・・

レビイ「待ってください！！マスター！」

マカロフ「傷つけた分このギルドでみっちり働いてもらうとしようかの」

俺・レビイ「・・・え・・・？」

マカロフ「何を考えたのかは知らんが、ここはお前の家じゃろう？帰って来て当たり前・・・わかったか？」

俺「はい・・・！！ありがとうございます！！」

こうして俺は再び妖精の尻尾始めました！

神の子（前書き）

感想を書いてくれた方！ありがとうございます！

これからも頑張って更新していきますので、生暖かい視線で見守ってやってくださいww

評価くれた方もありがとうございます！この評価が自信にも繋がるので更新する気力がもうわんさかと・・・！！ww

では、本編をどうぞっ

神の子

- リオside -

今回の仕事は俺とレビィとジェットとドロイ、シャドウ・ギア+1のメンバーで行くことになった

ジェット「でもよ、今回は闇ギルドを潰すんだろ？」

ドロイ「俺達でできるのかな」

俺「まあ、なんとかなるんじゃないかねえか？」

レビィ「うー・・・ちょっと恐いかも」

ジェット・ドロイ「レビィは俺達を守るぜー!!」

まあ、なんとかなりそうだな。実際

今回の相手は闇ギルド最近何かと悪い噂を聞く悪魔の狩人<デーモンハント>っていうギルドだ。調べによると強い奴はせいぜい二人、ライザーっていう奴とゲイルって奴の二人だ

俺達の戦力でどうにかできるかわからんが、なんとかするしかないだろう。

俺「そうだな・・・俺が強いって噂の二人を引き受けよう。後はお前等に任せるぜ」

ジェット「何カッコつけようとしてんだよ、もう一人は俺達でやってやるぜ」

ドロイ「そうそう、俺達シャドウ・ギアに任せとけ」

あー・・・心配だよ、色々と

レビィ「あつ、見えてきたよ。あそこが悪魔の狩人のアジトだ」

俺「よし・・・一気に終わらせるか」

ジェット・ドロイ「おう！」

俺たちは悪魔の狩人へと攻め込むこととなった

「何だデメエら！」

「俺達に喧嘩売って無事でいられると思うなよ！」

さっそく戦闘開始なわけだが、用心していた二人が見つからないつてのが気がかりだ

俺「お前等に用はねえんだって、風刃螺旋舞！！」

幸い、相手は大したことが無く順調に仕事は進んでいた・・・奴らが現れるまでは

??「オイ・・・アイツら妖精の尻尾だよな？」

??「そうだ・・・俺はアノ中で一番楽しめそうな・・・そうだな、

アイツとやろう」

俺「あらかた片付いたな・・・あとはお前等二人を潰すだけだ」

ライザー「ほう・・・俺はライザー、せいぜい楽しませてくれよ」

アイツがライザー・・・嫌な気配がずるぜ。となると、もう一人のほうゲイルか

ゲイル「女がいるじゃねえか！ひゃっはー！！ついてるぜ！」

ジェット「リオ、ソイツは任せたぜ！」

ドロイ「こっちは俺達が何とかするからよ」

レビィ「シャドウ・ギアの腕の見せ所だね！」

ライザー「それよりも仲間に出会えるなんて思わなかったぞ」

仲間・・・？明らかに俺に向けて発せられた言葉だが心あたりがない

俺「何言ってるんだ？」

ライザー「そうだなあ・・・お前は鳳凰、俺は麒麟だ」

なに！？・・・え、どういう意味だ？

ライザー「俺たちは神殺しの魔法を持つ、滅神魔導士なんだよ。おわかり？」

俺「それで、仲間ってか」

ライザー「せっかく出会えたんだ、そんなゴミ共は捨てて俺らと来いよ」

ゴミ・・・ゴミって言ったのか？

俺「家族をゴミ呼ばわりされて、はいそうですかって聞くとても？消え失せるカスが」

ライザー「そうか、それは残念だ」

- レビイ side -

リオの方は戦い始めてしまったみたい。情報によると相手は風の魔導士だって聞いてたけど・・・

ゲイル「お前は俺の女にしてやるから喜べえ！」

私「嫌だ！」

なんなのコイツ・・・き、気持ち悪い

ジェット「レビイは下がってる先に俺が行くぜ！」

ドロイ「待てよジェット、俺もやるって」

ジェットとドロイが相手に向かって行く

ジェット「隼天翔!!」

ゲイル「駄目だねえゝそんなんじゃ」

ジェットの隼天翔は相手に届くことなく弾きとばされてしまった

ドロイ「ナックルプラント!!」

ゲイル「無理無理!!テンペストカッター!!」

ドロイのナックルプラントは竜巻によって切り裂かれてしまう。どうしよう・・・コイツ凄く強い・・・!!

私「立体文字!FIRE!!!」

ゲイル「おーおー熱いねえ・・・でも、まだ足りないよね!」

私の立体文字が竜巻によってかき消されてしまう

相手はまだ余裕で私達の魔法が通用しない・・・いったいどうしたら・・・

- リオside -

ライザー「雷天角!!」

雷を身にまとい、雷の角で突撃してくる

俺「岩翼の守り・・・岩甲の盾!!」

岩の翼を前に出し、亀の甲羅を思わせる盾を作り出し相手の突撃を受け止める

ライザー「ざーんねん。それじゃ俺の攻撃は防げねえ!!」

俺「ちっ・・・!」

岩の盾を貫通し、突撃してくるライザーを何とかかわすと岩の翼を戻し風の輝きを手に集める

ライザー「その程度か?」

俺「まだまだ、風刃の舞い”百花繚乱”!!」

ライザー「ぐあ!!」

ライザーを竜巻の巻き込み数え切れないほどの風の刃で切りつける

ライザー「神殺しの魔法・・・流石に効くな。いくぜ、豪雷天!!」

雷に囲まれる

俺「しまった・・・!!」

カイザー「砕けろオ!天鎚!!」

雷の槍が降り注ぎ、体中を貫いていく

俺「ぐっ・・・！！傷が治ら・・・ねえ！」

カイザー「言つたろ・・・神殺しの魔法だつてな」

これが滅神魔導士、まさか再生の炎で塞がらない傷がでてくるなんてな・・・

これは意外とヤバい状況だ・・・光の輝きは、まだ体にかかる負担が大きいがやるしかねえ！

光魔の力

- リオside -

俺「闇を退ける破邪の輝きよ・・・」

背中に4枚の翼が現れる

ライザー「見てくれが変わっただけじゃ俺には勝てないぜ？」

まだだ・・・俺には奥の手がある

俺「全てを無に帰す深淵の輝きよ・・・」

半分の翼の色が黒へと変わっていき魔力がさらに膨れ上がっていく

ライザー「急に魔力が・・・！？テメエ何しやがった」

俺「少し無理しただけさ、行くぜ。光魔の槍グングニル！！」

両翼から光が溢れ、一本の槍を作り出す

ライザー「天地雷皇・・・」

ライザーの体に今までにないほどの雷が宿り魔力が上がっていく

俺・ライザー「滅神奥義！！」

俺「アブソリュート・ゼロ！！」

ライザー「破光神雷剣!!」

俺の投げた槍とライザーの作り出した剣が衝突し大爆発を起こした

ライザー「ぐ・・・あ」

ライザーはどうやら気絶したようだ・・・俺も魔力をほとんど使ってしまい動けそうにない。

だが、仲間に俺の残りの力を・・・!!

- レビイ side -

ドオオン!!

凄い爆音とともにライザーが飛ばされていくのが見えた

私「リオは勝てたみたいだね」

ゲイル「アイツがやられたのかよ・・・!? チツ・・・コイツら片付けてあそこに倒れている奴をとつと潰しちまうか」

ジェット「レビイは下がってろ!!」

ジェットとドロイが私の前に出て相手と戦っているが長くは持ちそうにない

やっぱり、私じゃ駄目なのかな・・・

そう思った次の瞬間に私の中に力が流れてくるのを感じた。リオの方を見ると何かを言っているようだ

リオ「お前ならやれる・・・思いつきりぶっ飛ばしてやれ・・・」

うん・・・私、頑張るよ！！

レビィ「立体文字！！ Tempest（嵐）！！ Estrell
a（流星）！！」

嵐は風の魔力で威力が上がり相手の風を打ち消すことができた。流星はリオの地の力と光の力、闇の力をあわせて発動することができた。まだ小さいけれど今ならアイツを倒せる！！

ゲイル「流星！？・・・う、うあああ！！！！」

ゲイルは普段から風を鎧のように纏わせていたから相手の攻撃をよける必要がなく、相手の攻撃は暴風に弾き返される。だから攻撃されるのに馴れていない。だから、今回の攻撃はよけることができなかった

爆音と共にゲイルの倒れている姿が確認できた

私「リオ、私やったよ！！」

リオ「ああ・・・頑張ったじゃんか・・・」

リオはもう魔力を使い切っている状態で動くことはできそうにもなかったのでドロイに運んでもらうことにした

ライザーとゲイルも捕まえることもできたし一件落着！！

今回の仕事は大変だったけど無事完了しました

- リオside -

光と闇を同時に使ったのは初めてだ・・・むしろ、闇は使ったことすらなかった。

内側から焼かれるようなダメージ、まだまだ修行が必要そうだ

レビイ達も何とかできたみたいだし良かった・・・ああ眠い

いいや、もう寝ちやおう

俺は襲い来る睡魔に打ち勝つことができずに眠りにつくのだった

今日は休日！前編

- リオ side -

さて、今日は何もせずにベッドで寝ていよう・・・うん

レビィ「朝だよー！」

・・・え

レビィ「早く起きてよリオ！」

・・・え？

俺「何故ここにいるか、10文字以内で答えよ」

レビィ「出かけようよ、一緒に」

俺「文字数オーバーだ、おやすみ」

そうすると少し大人しくなったので、そのまま眠りにつこうと思っていたのだが・・・

レビィ「立体文字、騒音！！」

俺「ノー！！勘弁してくれ。起きるから！」

こうして無理やり連れ出されるのであった。これから一体どこへ行くというのか

レビィ「じゃ、何しよつか？」

俺「そうだな・・・帰って寝るとか？」

レビイ「却下」

即答ですよ、どうしたもんかね。特にやることもないし

俺「テキトーに町を歩こうぜ」

レビィ「わかった」

散歩がそんなに楽しいものなのか？良くわからんがレビィは楽しそうだ

Side out

- レイ
side -

今日はリオと二人で出かけることにしたんだ。でも肝心な行く場所が無くて色々なお店を見てまわったりしています

・
・
リ才は横で眠たそうに欠伸をしている、もしかして迷惑だったかな・

リオ「別に迷惑じゃねえよ？」

私「え！？声に出てた？」

リオ「いや・・・なんとなくそんな感じだったからさ」

私「そ、そっか・・・ふう」

良かったー・・・迷惑じゃなくって。最近は大変そうな仕事ばかりだったからリオも疲れてるのかも・・・

少し休憩しようかな

私「ちよつと休んでいこ？」

リオ「え？おお、了解だ」

side out

- リオside -

レビィ「最近仕事忙しそうだね・・・疲れてる・・・？」

急にどうしたんだ？良くわからん奴だ

俺「いや？それにしても、たまにはこうやって町を歩くのもいいよな。レビィ面白いし」

レビィ「わ、私が面白いつてどういうこと！？」

あらら、顔を真っ赤にして・・・もしかして怒ってるのか？

レビィ「休憩は終わりっ、早く行くよ！」

そう言ってレビィは俺の手を引張っていく

これは、まだまだ帰れそうにないな

今日は休日！後編

- リオ side -

結構、強引に連れ出された俺だったがそれなりにレビィと一緒に過ごす時間を楽しんでいた。

レビィ「次はどこに行こっか？」

俺「そうだな・・・そろそろ昼時だし飯を食いたいところだな」

そうして飲食店を目指して歩いていると、一つのペンダントが目に入った。なんとなくだが、レビィに似合いそうな気がしたのでバレないように購入し一日が終わることにプレゼントとしてあげることにした

その後は飯を食べて、近くの広場へと向かい色々なことを話した

レビィはそんなこと思っていないのだろうが、ジェットとドロイは大して役に立ててないみたいだ

レビィ「そういえば、リオはS級試験は誰と組むの？」

S級試験とはその名の通りS級魔導士へとなるための試験である

俺「んー・・・考えてないな。それに俺が選ばれるかもわからねえし」

そう、俺は苦笑気味に答えた

レヴィ「じゃあ、もし・・・もしだよ？私がS級試験に選ばれたらパートナーになってくれる・・・？」

レヴィのパートナーか・・・まあ、レヴィは色々心配なところもあるし都合が良いのかな

レヴィ「やっぱり駄目かな・・・私弱いし小さいから・・・」

俺が黙り込んだので何か勘違いさせてしまったらしい、それより小さいは関係無いんじゃないか？

俺「俺で良ければレヴィのパートナーになってやるよ」

レヴィ「ほ、ほんと・・・！？」

俺「ああ、絶対にS級魔導士にしてやる。約束だ・・・それに、前は弱くなんかねーよ魔導士は力だけが全てじゃないんだぜ？」

レヴィ「う、うん・・・！！ありがとう」

そう言うときレヴィは涙を流し始めてしまい、町の人達の視線が痛くなっていた

俺がレヴィを泣き止ませることに成功するころには既に日は沈んでいた

レヴィ「すっかり暗くなっちゃったね・・・」

俺「だな・・・」

今は俺もレビイも帰路についている。途中までは一緒なのでそこまで歩いていく

レビイ「でも本当に私でいいの？パートナー・・・」

俺「何回も言わせんなって・・・それに、お前でも良いんじゃないかってお前だからパートナーになるんだ」

レビイ「え、ええ・・・！?!」

何か言い方を間違えたのだろうか、レビイの顔は真っ赤だし・・・
ってか、心配だからついて行ってやるんだけどな

そうして歩いているうちに別れ道へと来てしまった

レビイ「ここまでだね・・・今日は色々ありがとう」

俺「俺も楽しませてもらったし俺のほうこそお礼を言わなくちゃな、ありがとう」

えへへ、とレビイは笑ってその後帰って行ってしまいそうになった
ところで今日買ったプレゼントのことを思い出した

俺「レビイ！これだこれ、今日のお礼ってわけじゃないけど・・・」

俺はレビイのところへと走っていきペンダントを手渡した、最初は
凄く驚いていたが『ありがとう』と笑顔で喜んでくれたので買った
かいがあったというものだ

そして、レビイを見送ると自分の家へと帰るのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1125y/>

FAIRY TAIL ~ 五つの鳳 ~

2011年11月15日12時23分発行